

平成 30 年度

病害虫発生予察情報 第 12 号

特殊報第 1 号

北海道病害虫防除所 平成 30 年 7 月 18 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

トルコギキョウベと病(仮称)の発生について

発生確認作物:トルコギキョウ(*Eustoma grandiflorum*)

病 害 虫 名:トルコギキョウベと病(仮称)

病 原 菌 名:*Peronospora chloerae* de Bary

留萌振興局管内のトルコギキョウ栽培ハウスにおいて、これまで国内での発生報告がなかった病害であるトルコギキョウベと病の発生が確認された。本病は、北米、ヨーロッパ、オーストラリア、中国など世界各地で発生している。

1. 発生の確認経過

平成 30 年 5 月、留萌振興局管内のトルコギキョウ栽培ハウスにおいて、株が黄化し葉に灰色のかび(分生子)が密生する症状が発生した。病株の葉に認められた分生子の形態的特徴から、発生した病害は国内でこれまで報告のないトルコギキョウベと病であることが疑われた。このため、横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本菌は *Peronospora chloerae* de Bary と同定され、道内においてトルコギキョウベと病の発生が確定した。

2. 発生生態

(1) 病徴

海外での報告によると、トルコギキョウベと病は、全身感染した場合には、株のわい化や湾曲、葉の黄化や淡色化が認められる。主に二次感染で病徴が葉に限られる場合には、多くの場合、斑点状の黄化や淡色化が見られ、表面に綿毛もしくはフェルト状の病原菌の胞子が認められる。

(2) 伝染源

詳しい伝染環は明らかになっていないが、休眠胞子は残渣や土壌中で数年間は生存して、伝染源となると推測されている。また、葉上などで形成された分生子が二次伝染源となる。病原菌の宿主範囲は狭く、トルコギキョウを含むリンドウ科の植物の一部(リンドウは含まない)のみとされている。

3. 防除対策

- (1) 発病株は伝染源となるため、すみやかに抜き取り、ほ場外で適切に処分する。
- (2) 本病の拡散を防ぐため、発病株や感染が疑われる株については、外部に持ち出さないようにする。
- (3) 病原菌の胞子形成や飛散を防ぐために、頭上灌水は避け、ハウス内が過湿とならないように管理する。
- (4) 残渣上などに形成される休眠胞子は数年間は生存すると考えられているため、発病株をすき込んだハウスでは数年間トルコギキョウの栽培を控える。
- (5) 本病の発生が疑われる場合には農業改良普及センターや北海道病害虫防除所等に相談する。



写真 1: ハウス内での発病状況
(発病株の草丈は低くなる)



写真 2: 発病株に見られる葉の黄化

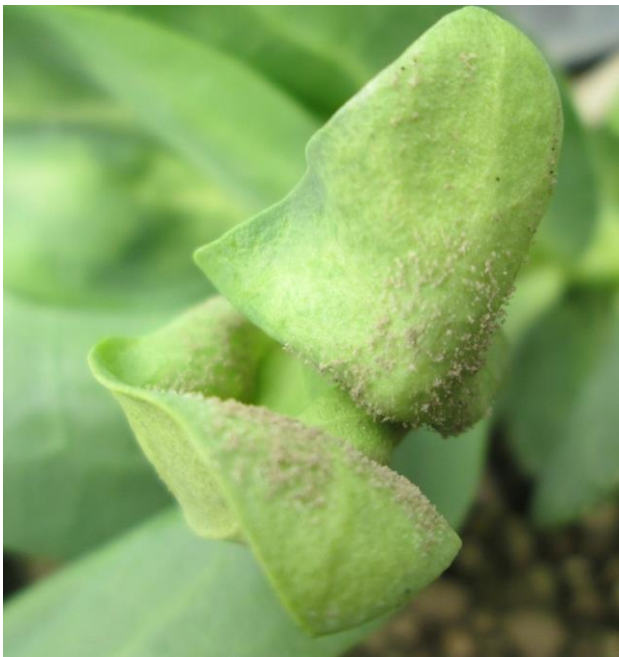


写真 3: 葉上に見られる分生子